

天草洋に泊す（頼山陽）

雲か 山か 呉か 越か

水天 髣髴 青 一髪

万里 舟を 泊す 天草の 灘

煙は 篷窓に 横たわって 日漸く 没す

瞥見す 大魚の 波間に 躍るを

太白 船に 当って 明月に 似たり

雲耶山耶吳耶越 水天髣髴青一髪
萬里泊舟天草洋 煙橫篷窗日漸沒
瞥見大魚躍波間 太白當船明似月

解説 文政元年、山陽三十九歳の時、京都から西下し、九州を旅し、天草洋に舟泊りして作った作品である。

語釈 ※天草洋Ⅱ天草島と島原半島付近の海をさす。※雲耶山耶Ⅱ景色が雲なのか、山なのか、見分けがつかない。※吳耶越Ⅱ吳・越は中國春秋時代の国。※水天Ⅱ水と天の境が一つに溶け合っているさま。※髣髴Ⅱ彷彿。かすかなさま。※青一髪Ⅱ水平線が青く一直線に一筋の髪の毛のように細くつながっている状態。※万里Ⅱ旅の出発点から遠く来ていることを表わす。※煙橫Ⅱ煙は霧か霞の類。※篷窓Ⅱとまをかけた舟の窓。※瞥見Ⅱちらりと見える。※躍波間Ⅱ魚が波の上に、その身を躍り上がらせているさま。※太白Ⅱ東方に見えるのを啓明・西方に見えるのを太白という。※当船Ⅱ金星の光が舟の前方に輝いている状態。※明似月Ⅱ金星の光が月のように明るいこと。

通釈 はるか彼方に見えるのは雲か山か。または呉の国か。越の国か。水と空とが交わる水平線は一筋の頭髮をぴーんと張ったように青く見える。自分は京都から遠い天草洋に来て、舟泊りすることにしたのだが、霧が舟の窓辺に湧き出て、海面に流れていく。陽も沈みつゝある時、大きな魚が波に躍り、舟の正面には、太白星が月のような明るさを見せている。